

Title	水内出張所の誕生
Author(s)	金森, 丁壽
Citation	天界 = The heavens (1931), 11(118): 151-154
Issue Date	1931-01-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/161620
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

水内出張所の誕生

金森 丁 壽

去る8月下旬、私は夏期志願助手として花山天文臺へ上りまして、山本先生はじめ、臺員の方々から非常なる御世話を受けました。

わづか10日の天文臺生活ではありましたが、それは私に一生涯忘れることの出来ない深い印象を與へました。それに、また、この生活と山本先生の切なる御親切とが奇なる縁となり因となりまして、今度、花山天文臺より10cmのハイデ赤道儀を御借り致しまして、これを今私の勤めております学校の一隅に据え付けていたゞきました。形式は京都帝國大學花山天文臺水内出張所と云ふのですが、今からは主としてエロスの光度觀測を行ひ、その後は變光星の眼視觀測をはじめる豫定であります。

この出張所の出來上るにつきましては、山本先生は深く御配慮下さいまして、二度までもこの信濃の山間へ御出で下さいまして、總てに互つて御親切に御指導して下さいました。先生のかくも御熱心なる御態度に深く敬意を表します。また天文臺の方々や、天文同好會員の諸氏、それから當校の職員、村民の人々から陰に陽に少なからざる應援を受けましたことは、これまた感謝の外はありません。

天界7月號の夏期志願助手募集の御しらせを受けましてから、何とかして1日でもよいから天文臺の生活を味はつてみたいと願つておりましたところ、幸にも、この願ひが叶ひ、山本先生より「何時にても來るべし」との御手紙をいたゞきましたので、飛び立つばかりに喜び、秋蠶休みを幸に、風呂敷包を背負つて急ぎ花山天文臺を訪れました。その時はもう秋も近い8月下旬のことではありましたが、まだ京の都は煎らんばかりの蒸し暑さでした。汗びつしよりになつて電車から降りますと、河童の群が動物園の前の水道に澤山見えつ隠れつしてゐました。併し天文臺の坂道へかゝり、下界をはなれて一步二歩と進むほどに、この暑さも次第に消え失せて、山頂より涼しい初秋の風がそよそよと吹いて來ました。何となくよい心地になつて、一人ほつほつ坂道を登つて行きました。もうそこには下界の様な

雑沓は見られませんでした。緑したゝる松林の奥には名も知らぬ小鳥が楽しげにさえずつてゐます。天文臺を訪れるのも、天文臺の方々に御會ひ出来るのも、みんな初めてです。そんなことを考へながら登つてゆくと、嬉しい様なまた困つた様な氣がして、まるで夢心地でした。ニウトン凹路を越えて暫く進んだ時、右手の松間にちらつく白壁がみえました。それは天文臺の建物の一部でした。私の胸はもうどきどき致しました。宿舎を訪れて、眞先に中村さんに御面會いたしました。背の高い、元氣そうな快活な方でした。天文臺の中を一通り案内していただき、いろいろの説明やお話を承りました。物めづらしい私には皆不思議な機械ばかりでした。夕方、山本先生が御出で下さいまして、10日間になすべき種々のことについて御話し下さいました。もう大ていの志願助手の方が歸られた後でしたので、天文臺の中は比較的閑靜でした。下界を離れたこの別天地に、お互にうちとけて楽しく星を語ることが出来ることは、誠に天國そのまゝの姿でありました。出来ることなら、づつと此のまゝ長く御世話になりたいと思ひましたけれど、信州の奥には私の歸る日をたのしみに待ちこがれてゐる多くの生徒がありました。で、名残惜しくも天文臺の生活は10日間で切り上げねばなりませんでした。併し、この間に味ひ得ました溫き心の世界と、星への憧れは、永へに私の腦裏へ深くきざみ込まれて、忘れることが出来ないであります。

この10日間は、主として中村さんの15cm 反射望遠鏡をお借り致しまして、變光星の觀測を致しました。反射望遠鏡では星の像が非常に美しく見えるのに驚きました。從來、私の使つて來ました望遠鏡は5cmの日本光學工業株式會社のレンズで、手製の12倍でした。外見十八世紀を物語りそうな物でした。山本先生はこのことに深く同情して下さいまして、例の10cm ハイデ望遠鏡を時に御貸しし様かと申されました。私は心で大變喜びましたけれど、直ぐ、また、この様な歴史を有つ立派な望遠鏡を御願ひしても却つて御心配をおかけ申すのみにて、充分その使命を果し得ないかもしれない事を懸念致しました。併し、若し叶ふものならば出来るだけ勉強させてもらひたいとのことを申し上げて、歸郷しました。

その後このことを學校の校長や職員方に話しました所、皆喜ばれて、大いに應援して下さいとの由でした。何處へ行つても、こう人々の御世話になつては濟まないと思つてゐましたところ、村の人達も此のことを聞きつけて、盛んにおしかけて来て、手助けをして下さるとのことでした。この由を山本先生に申し上げましたところ、先生は早速お喜び下さいまして、去る10月21日に望遠鏡の位置選定のため、わざわざ當地へ御出で下さいました。「こんな山奥へ御出で下さいましたことは恐らく御始めてでございませう」と申し上げましたところ、先生は、たゞ、ニコニコお笑ひになれるのみでした。ほんとに濟まないと思ひました。望遠鏡を据付ける場所は校庭の前の桑畠でした。(この畠はその後、學校の農業實習地として全部借り入れてもらひました。)標高490mで5萬分の1の地圖上で經度緯度を求めますと大略次の様な結果を得ました。

東 經 139° 3' 10'', 北 緯 36° 34' 26''

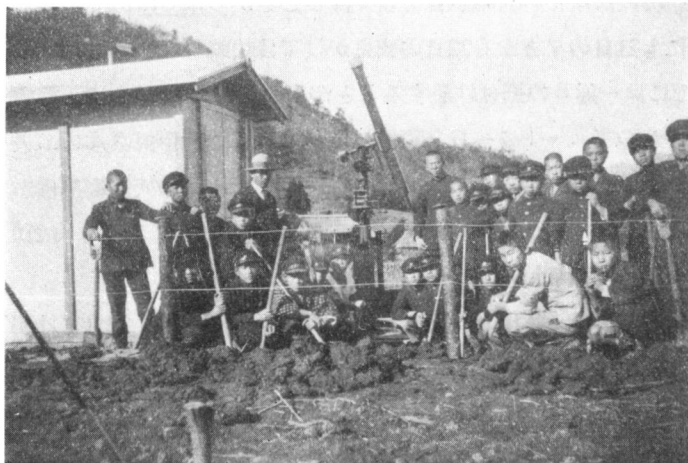
其の後、望遠鏡の被ひとする移動式バラックの工事は、村の應援を得まして、間もなく完成致しました。そして、再び山本先生が望遠鏡据付けのため御出で下さいましたのは去る21日の早朝のことでした。其の頃は毎日の様に曇天で、時には冷たい秋雨が音もなく降ることがしばしばありましたが、不思議にも21日の夕方から22日の夜にかけては快晴つゞきでした。それ故22日までには一通りの据付けをすることが出来ました。因みに、この赤道儀には、かつてスマトラへ日食觀測に遠征された時、中村さんの工夫された美事な時計仕掛けがつけられてあり、尙ほまた5cmの天體寫眞儀が1箇附屬してあります、接眼レンズは5箇で、(うち地上用1箇)、55倍より210倍まで變へることが出来ます。

さて、山本先生には、連日の御疲れであるにもかゝわらず、22日には學校の生徒を集められて面白い星のお話をして下さいました。兒童達はすつかり先生をすきになつてしまひまして、よつて太陽の黒點を見せてもらひました。この日の夕方、松代の中澤登先生をはじめ、縣内の各所から天文同好會員の方々が御出で下さいました。そして村の方々や學校の職員と共に山本先生を中心として簡單な出張所の開所式が行はれました。この

席上で、山本先生はこの望遠鏡の履歴について約30分間御話して下さいました。過去に於て數多活動した此の望遠鏡はつい最近もエロスの姿をうつして、古畑さんにかくも偉大な発見をなさしました。この様な事を考へますと、また何かしら將來が氣づかれます。また、この夜は珍しい天體寫眞の幻燈會を催していただきましたので、村内の老若男女は云ふに及ばず、近郷からも澤山の人々がおしかけて來ましたので、講堂は満員400人の盛況でした。田舎では珍しい會合です。先生の御丁寧にして、而も不可思議なる御講演には、なみゆる群集は只々星の宇宙の雄大さに驚異の眼を開くのみでした。

「天文學はそが吾人をして吾人自身を超越せしめるが故に有要なり」
と喝破しましたボアンカレ氏の言が今更の如くに思ひ出されるのでした。

23日には篠井と松代とにおいて講演と幻燈とを御願ひ致しました。篠井においては先生を中心として長野縣の各地から集られました同好會々員諸氏と共に懇親會を催しました。この夜山本先生は直に京都へ御歸りになられました。私はこの翌日1人で望遠鏡の下に立ちました。それは靜かな日暮れ時でした。淡い夕陽が四方の山々に流れて色失せた落葉松が薄黃色にほんのりと光つて見えます。つるべおとしよりも早いとか云ふ晩秋の夕陽は間もなくアルプスの彼方におちてしまひました。しばらくたちますと南西の空低く土星が輝き出しました。靜かに空を仰げば、未だ暮れきらぬ



青空の奥より、淡い星がいくつとなくもれて來ます。私はたゞちつと星のまたゝきを見つめました。この夜、私はこれらの星のまたゝきの中に私

の少年時代の母と私の姿をみつけました。そしてまた愛らしき生徒のひとみも尙また無數の兄弟の美しき心の輝きもみつけました。(十一月30日)